琉球大学学術リポジトリ

フォルカード神父の到着から50年後の琉球諸島：アルブ神父の報告書

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所
	公開日: 2015-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮里, 厚子, Miyazato, Atsuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31195

『国際琉球沖縄論集』第 4 号
2015 年 3 月

【翻訳】

フォルカード神父の到着から 50 年後の琉球諸島

―アルブ神父の報告書―

宮里　厚子*

50 Years after P. Forcarde's Arrival to the Ryukyus

―Halbout's Report―

MIYAZATO Atsuko*

はじめに

« 50 ans après l'arrivée du P. Forcarde aux Ryukyu »と題されたこの報告書は、フランス人宣教師オーギュスタン・アルブ[Augustin Halbout]が奄美大島滞在中の 1895 年に琉球を訪問した時の記録である。執筆したのは 1927 年で、1928 年の『パリ外国宣教会会報』に掲載された[1]。アルブは 1864 年フランス北西部で生まれ、1884 年にパリ外国宣教会に入った神父である。その 5 年後、1889 年 1 月に日本入りし、語学の勉強をした後、1893 年から 27 年間奄美大島で布教に努めた。その後も九州各地で神父として布教活動をした後、1941 年には退職を届け出るが 1945 年 1 月に亡くなるまで日本に滞在した。

開国とキリスト教解禁にともない宣教師たちが日本本土に渡ったことで、1860 年代後半以降、沖縄には在留する宣教師がいなくなっていた。この報告書は、かつて日本宣教への布石となった沖縄に、先人たちの足跡を確認しようとアルブ神父が訪問した際の記録であるが、ここで注目すべき点は、1844 年の琉球王朝時代に到着したオーギュスタン・フォルカード神父の時代から、「琉球処分」を経て明治時代の「日本化」されつつある沖縄の変化が描写されていることである。1840 年代から 1860 年代にフォルカードらフランス人宣教師たちが在留していた時代と比べると、首里城は日本兵の兵舎へと変わり、こぎれいな街並みを呈していた那覇の町が商人であふれ清潔感を失っている様子などが記録されている。

---

*琉球大学法文学部国際言語文化学科准教授　Associate Professor, Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus.　本翻訳は、JSPS 科研費 24320056 の助成を受けた研究の成果の一部である。

他にも、学校の教職員たちが未だ琉球式に髪を結っている生徒たちをどうにかやめさせようと躍起になる姿にアルブ神父が疑問を呈する場面などもあり、琉球の街並みだけでなく、人々の生活習慣も徐々に変化が突き付けられている様子も描写されている。さらに、フォルカードたちの時代に四六時中監視の目を光らせて人々との接触を妨げていた役人たちの姿はもちろんなく、アルブ神父がどこへ行っても気さくに声をかけられ、洗礼を受けさせてくれるよう頼みに来る者さえいたこともうかがえる。この報告書を読むうえで、琉球王国時代に先人の宣教師たちが記した滞在記と比べると興味深いであろう[2]。

＜報告書和訳＞

琉球列島の主要な島・沖縄から 80 里の所にいる私は、そこで数年間を過ごした我々の神父様たちの思い出がまだ何か残っていないか見てみるため、この島の訪問を望んでいた。

1895 年 4 月 27 日の朝、知名瀬にある自宅を出たが、桟橋まで急ぎはしなかった。というのも、海が荒れていたので、名瀬に停泊していた鹿児島の船が遅れるかまたは来ないだろうと思っていたからだ。2 時間で名瀬に着いた。港には一隻の船もなかった。フェリエ神父は、私の到着が遅すぎたと告げた。［中略］翌日、海は穏やかになっており、いい航海を予感させた。乗船すると、多くの乗客がいた。数人の太った大蔵省と文部省の役人が沖縄に行くところだった。前者は貨幣による税金の支払いを行うためであった。当時、税金は現物、つまり島の主要産物である砂糖で支払われていたのである。後者は、那覇の一地域に住んでいる中国人の子孫たちが、彼らの子供たちを彼ら独自の学校や中国の学校ではなく、日本の学校へ通わせるよう義務付けるためであった。船にはさらに、京都の博覧会を見に行ってきた琉球の師範学校の教師と生徒も乗っていた。学生たちに日本の一部を見せることで、他の人のうわさではなく、ありのままの日本を彼らに見せることを目的としていた。この穏やかな天気によって、乗客たちは本当に海を楽しみ、会話もまた非常に盛り上がっていた。師範学校の校長が私と話しをしに来て、島の古都・首里にある彼らの学校に来るよう誘った。

翌日、日が昇ると、我々は一里ほどの距離を取って沖縄の沿岸に沿って進んだ。島がサンゴ礁で囲まれているので、船はさらに近づくことはできないのである。10 時に、多くの白い建物が目に入ってきたが、私のようにこの国を知らない者はそれが那覇の町だと思っていた。しかし 1 時間後、南に進む我々の船は川に入るために直角に曲がった。我々が住居だと思っていた建築物が実際は石灰で覆われた墓だということに気付いたのはその時だった。それは聖書に出てくる墳墓を私に思い起こさせた。町は川の反対側、左側にあった。高潮であり、我々の船が小さなトン数であったおかげで、200 メートルも川に入ること

ができた。次に我々は艀に降りたが、その当時は波止場がなく、階段へとつながっていた。フォルカード神父が上陸したのもおそらく同じ場所だったであろう。私は上陸したもののどの方向に足を向けていいのかわからず、警察官に気付いてホテルを教えてくれるよう頼んだ。「実は、一つしかないのですが、蒸気船案内所なのでかなり騒がしいのです。しかし個人で外国人、特に首都から来た外国人に部屋を提供している者たちがいます。そちらのほうがあなたにはいいでしょう」と、彼は言った。事実、教えてもらった家に他の客はなく、非常に快適だった。

この当時、那覇には約 2 万人の住民がおり、そのうち数千人は大阪や鹿児島から来た商人たちだった。すべての商いは彼らの手の内にあった。彼らの地域は日本にあるごくありふれた町の一地域によく似ていた。しかし、地元住民の地域は、それぞれの敷地が非常に高い壁で覆われ、各家の入口正面は、道路から家のなかが見えないように、高い壁が内部を隠していた。みな警察の詮索するような視線を逃れたいというのが理由だった。道はあまり清潔ではなく、よどんだ水が溜まった溝は悪臭を放っていた。地元住民の地区の中心には久米村があった。中国人の子孫たちが住んでいたのはこの地区であり、他の住民達とは全く違った生活を営んでいた。少し行くと、同じ通りに市場が開かれている場所があった。毎朝、野菜、果物、果ては豚まで、商品を頭に載せた女たちがいたるところからやって来るのが見えた。午前中、市場は大変にぎやかで、お昼にはすべて終わり、各自家に帰った。市場では男が働いているのを目にしなかった。港でさえ、男たちは船荷を降ろす作業をしていなかった。このような大きな仕事は女性に限られていた。家で使うための水を町の外の小山に汲みに行くのも女性たちの仕事だった。那覇では水は飲料不可だったからである。

町には目立った建造物は何もなかった。一番高く、ちょうど海の正面に位置する最も美しい場所に町で唯一の神社があった。

私の宿泊所の主人が天久（日本語でアミノコ）の寺がどこにあるか教えてくれ、午後に行ってみた。この寺は那覇の町と同じ湾にあったが、特に引き潮の時は、小さな舟でさえ近づくのは難しかった。小舟を降りたあと、泥や石のなかを歩かなければならず、その後道路にたどり着いた。寺に続くその道は、首里に続く道であったが、町から 2 キロのところで分かれ、寺へとまっすぐ続いていた。寺に着く前に、左には外人墓地があった。松の木陰に墓が並んでおり、その中にアドネ神父[3]とフランス人水兵の墓を確認することができた。アドネ神父の墓は横 1 メートル、縦 2 メートルで、1 ピエほどの高さがあった。墓は荒壁ででき石灰で覆われていた。墓の上にはスレートでできた板が中央にあり以下のように書かれていた：

日本司教代理区フランス人宣教師

マチュー・アドネ師ここに眠る
1848 年 7 月 1 日琉球にて没す

その他の墓の大部分はイギリス人のものだった。

仏教の寺は特徴がなく、ほかの建物と変わりなかった。同じ屋根の下には、まず前方にベランダがある 16 ㎡の部屋があり、次にそれとほぼ同じくらいの大きさで仏壇がある部屋がある。反対側は住職の住居である。これにもう一つ建物が併設されており、離れに使われている。建築は古い。神父たちが住んでいたのはこの建物である。境目の壁側のベランダの隅からは海が見えたが、川には入り込めない船が接岸する部分の海で、沖まで見るには家から出なければならなかった。この建物を調べながら、住居部分に近づいた。その時、戸が開き、一人の坊主が現れた。私があいさつをすると、腰かけるよう勧めてくれた。我々はおしゃべりをした。私は彼にヨーロッパ人の師たちが住んでいたのは確かにこの場所か尋ねた。「確かにそうです。当時見習いの坊主として私はすでにここにいました。彼らを見かけました。彼らは入り口近くの部屋にいました」、と彼は言った。彼が知っているのは、少なくとも彼が言えるのはそれがすべてだった。彼は私にお茶を出し、それぞれの部屋を案内してくれた。確かに神父たちは窮屈だったようだ；彼らの世話役の者たち以外誰も立ち寄らず、監視役の者たちがすべての訪問を遮っていたこの場所で、彼らは隠遁者のように生活しなければならなかったに違いない。思い出に残すために、住職の了解を得て、神父たちが住んでいた部分の写真を撮った。この写真とアドネ神父の墓の写真は、マルナス師の日本に関する著書の中に収録されている。

宿に戻ると、鹿児島の出身で数年前にフェリエ神父から洗礼を受けたという一人のキリスト教徒の訪問を受けるという嬉しい出来事があった。片足をなくしていたが、仕立屋を営んでいるということだった。この善良な男は、最近授かった自分の子供に洗礼を施してくれるよう頼んだ。それから、彼に教えてもらって、午後に島の農事試験場に行ってみた。この地域の唯一面白いところだった。県の農業部長が私を迎え、バナナの木、コーヒーの木、パイナップル、パパイヤなど導入しようとしているすべての作物を見せてくれた。株までいくつか私にくれた。それが大島への初めての移入となった。バナナの木はすぐに増殖したが、コーヒーの木は、台風の日に潮水に浸かり、すべて失われてしまった。

翌日私が向かったのは首里だった。首里はかつての首都である。那覇から 2 里ほどのところにあり、周辺を見渡せる高台にあった。天久の寺に続く道を通った後、長い坂がある。道路の片側に泡盛の酒造所が多くあるのが見えた。こ

の製品は日本中で評価されており、砂糖に次いでこの地域の主要な輸出品となっている。

道路（当時は島で唯一の道路だった）の先に、非常に高い壁で囲まれた広大な土地とそこへ続く鉄の門が見えた。かつて琉球の王が住んでいたのはそこだった。門があいていたので中に入り、城を見学することは可能か尋ねるため、どこに人がいるかを探した。この時、かつての城主はもうそこに住んではおらず、敷地は日本兵の小さな駐屯部隊によって占められ、彼らが島の秩序を維持する役割を担っていた。元城主の住まいは城壁の外に位置し、普通の家と変わらなかった。一人の兵士がやって来て、私の法衣を見ると喜びをあらわにした。天草出身のキリスト教徒で、大尉の当番兵だった。彼は私をその大尉のところに連れて行った。日清戦争が終わったばかりだった。大尉は、この島の人々が長い間日本の勝利を信じなかったということを話してくれた。「中国が負けるわけがない。日本の新聞が言うことはすべて嘘だ」と、彼らは言っていたらしい。島の北部では問題が発生しようとしており、大尉の助けが求められていたが、彼はこの場にいることが必要と判断し、北部に赴くのは難しいと思ったということだ。幸い平穏は保たれたが、信用は存在しなかった。ほんのしばらく前から電信機が設置されていたが、島の住民たちはこれを悪魔的だとみなし、警察が止めなければ電信柱を壊し、線を切っていただろうということだった。私が訪問した時には、この囲いの中には倉庫として使われている古い建物が一つ残っているだけだった。他の複数の建物は、古く使い勝手が悪いため解体され、兵舎に使われている新しい建物に取って代わった。この場所の一番高いところから、那覇とその周辺の美しい景色が見られた。

大尉が親切に受けいれてくれたことに感謝し、師範学校へ向かうためにその場を離れた。途中、警察の前を通ったので、町の情報と休憩してお昼ご飯を食べるところがないか尋ねるため中に入った。首里の町（人口約 2 万人）には、ホテルも店も旅行者のためには全く何もないという答えだった。すべての住民たちは元国王の使用人の子孫たちだということだ。

警察の近くに師範学校はあった。私は中に入った。教員も生徒たちも皆、中庭でカメラの前でポーズをとっているところだった。校長としばらく話した後に帰ろうとしているとき、高等小学校の校長が自分の学校にも来てくれるよう頼んだ。子供たちは非常に多く、ほとんど全て男の子だった。この時代、日本では、義務教育はまだ尋常小学校しかなかった。これは 4 年教育で、その後に高等小学校があったが、義務ではなかった。そこでも授業は 4 年間続いた。1927 年現在、尋常小学校は 6 年制で、高等小学校は 2 年である。高等小学校を廃止し、尋常小学校に統合することが懸案になっている。校長と教室を歩いていると、多くの子供たちがまだ長髪にし、巻いて木のかんざしで留めている。この

国の習慣なのである。学校の職員や教員は、これをどうしても止めさせようとしていたが、あまりうまくいっていなかった。首里や田舎の人々は、この国のほかの習慣同様、この髪形にも非常にこだわっていたのである。長髪を留めているかんざしのために子どもや大人たちを非難し、彼らが日本の習慣を採用しないのならいつまでたっても大なり小なり野蛮だ、と言うことが果たして必要なのだろうか？この島々の住民たちを非常に遅れていると見なしている日本から来た雇用人や商人、全ての個人は、彼ら自身の道徳を改め、彼らの行動によって悪い手本を見せないようにするほうがいいのではないか。那覇には悪い評判があり、その本当の犯人は地元住民ではないと信じるに足りる理由が私にはあった。これらの雇用人や商人の踊りへの情熱と愛情を満足させるためには、この島には人材が不足していた。歓楽施設の特殊な雇用のためには日本に行かざるを得ない。大島でも同じようなことが起こった。よそから来たこれらの人々のスキャンダラスな生活のせいで、いかがわしい施設が増えた。よそ者たちは地元住民に宗教心が足りないせいだとした。したがって、地元住民が我々神父に共感し、多くの者が改宗するのを政府の役人たちが見ると、役人たちは神父たちに成功を祈るだけでなく、困難があると協力してくれさえしたのだが、彼ら自身は自分たちの行動を改め、よい手本を見せようとはしなかったのである。彼らは大島の住民を賢くするには、仏教や神道などの信仰で十分事足りると思っていた。

正午前に私は宿に戻った。晩には地元のプロテスタント信者数人の訪問を受けた。数年前から外国人のプロテスタント牧師がときどき那覇へ来ていた。彼はまだ住居を見つけてはいなかった。彼は学生たちの中からのみ信者を探していた。勉強のために鹿児島や東京に行っている他の学生たちも他の宗派に所属していた。それで、1895 年には 3 つから 4 つの異なる宗派に属するプロテスタントたちが 20 人から 30 人はいた。しかし、その牧師が訪問するときにはそれでも全員が集まっていたようだ。私もそうしようと思えば、私のところにも同じぐらい集まっていたであろう。これらの若者たちはほとんど宗教的教育を受けておらず、彼らの影響力は全くなかった。あの当時以降、アメリカ人牧師が常駐しているおかげで、信者の数も少し増えている。

我々神父の強い願いにもかかわらず、この地方ではまだ我々の仕事は始められていない。クザン師がフェリエ神父を充てたが、健康上の理由から短期間の滞在しかできなかった。田舎に住んで住民の共感を得た後、改宗の機会がやってくるかもしれない。大島のように、ここ琉球の住民たちはとくに宗教というべきものは持っていない。彼らは祖先に対する慣習をいくらか守っているだけである。

見たいものはすべて見たので、5 月 2 日に球陽丸という 600 トンの小さな蒸気船に乗った。この船は、島の領主の退任に対する慰めとして、日本政府が彼に与えたものである。領主はこれをおもだった自分の使用人たちに与え、彼らはこれを島のために使うべく協会を創設したのである。この蒸気船は長い間、大阪と沖縄の間を行き来していた。船長から一番下のボーイに至るまで全てのスタッフは島の出身で、乗客へのサービスは非常によかった。この船の速度が速く、横揺れがもう少しなかったら、かなり我々の気に入ったであろう。

私が訪問した当時は、住民たちは島に来るすべての外国人にまだ恐れを抱いていた。家でもどこでも少しでも外国人が入ると、そこの住人たちは裏に隠れた。誰かを呼んでも誰も出て来てはくれず、外国人は自分自身で裏に回り訪問の目的を告げなければならなかった。住人たちが恐怖から我に返り家に戻るには、かなりの説明が必要だった。

この島民たちは、どこから来たのだろう。この地に一定期間滞在し、この問いに関して現地で調べなければ、答えるのは難しいだろう。琉球の言語は大島の言語にかなり似ている。二つの島の住民たちはお互いの言葉を理解しあえる。この点から言えば、彼らの起源は同じだと言えるだろう。マレーシアあたりかもしれない。琉球に関して言えば、多くの中国人が常駐していたことで、二つの人種が混じり合い、新しいタイプが生まれ、中国人に近づいたのかもしれない。

地元住民たちは優れた漁師である。松の木の幹をくりぬいた丸木舟で、彼らは沖に出ていくことを恐れない。大島はよく彼らが訪れる。彼らの軽い小舟は一度ならずとも転覆するが、彼らはそれでへこたれず、すぐに立て直すことができる。彼らには失うものがほとんどなく、重要なのは彼らの櫂を守ることである。波との戦いは続き、彼らは窮地を切り抜けるのである。

この海の猛者たちは大島の住民たち同様に腕がいい。それで、彼らが大島の領域に入って来ると、彼らに困難が降りかかり、時には不当にひどい扱いを受けたりもする。琉球の漁師たちが大島の住民たちだけのものだと思っている魚を獲ると、大島の者たちは時々彼らの網を粉々にし、まるで彼らの獲物であるかのように魚を奪うのである。

すでに述べたように、我々の先人の神父たちは琉球に根を下ろすことができなかった。おそらく、カナダのフランシスコ会の神父たちがこの地で多くの実りを得ることができるかもしれない。19 世紀における日本で最初の宣教師たち、外国宣教会の先人たちがあらゆる手段で我々の聖なる宗教を広めようとしたこ

の地で。あの当時は不可能だった。今日、完全なる自由を享受し、宣教師たちはどこへでも行くことができる。先人たちが、布教をさせてはもらえなかったものの、彼らの祈りで種をまいた収穫を刈り取る日が来ることを願おう。フォルカード、アドネ、ルテュルデュ神父たちの苦悩と苦しみによって祝福されたこの地に多くの信者があらんことを！この地上で、我々は彼らの勇気と犠牲に深い敬意を示そう。しかし、天の上で彼らは忘れてはいない。琉球のために今も取り成してくれるのである！読者のみなさん、皆さんも熱心な祈りでこの幸せな収穫へと急ぎましょう！

A・アルブ
在黒崎司教代理

【注記】

1) 報告書の原文は、Augustin Halbout (1928) « 50 ans après l'arrivée du P. Forcarde aux Ryukyu », *Bulletin de la Société des Missions-Etrangères de Paris*, Hong-Kong, pp.263-271 に掲載、Patrick Beillevaire 編 *Ryukyu Studies Since 1854: Western Encounter Part 2, Vol. 2*（『西洋の出会った大琉球　第二期：第二巻』）に収録。

2) 琉球に滞在した 8 人の宣教師の報告書や記録は、フランシスク・マルナス著『日本キリスト教復活史』（久野桂一郎訳、みすず書房、1985）に読むことができるほか、『幕末日仏交流記－フォルカード神父の琉球日記』（中島昭子・小川小百合訳、中公文庫、1993）、「ルテュルデュ神父の報告書」（拙訳、『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』[平成 9～11 年度科研成果報告書：研究代表者　赤嶺政信]、2000）、「ルイ・テオドール・フューレの手紙－フランス人宣教師の見た 1950 年代の琉球－」（拙訳、『国際琉球沖縄論集』第 3 号、2014）等に滞在記の一部を邦訳で読むことができる。

3) マチュー・アドネ[Mathieu Adnet]神父はフォルカードの後任として、1846 年からルテュルデュ神父と琉球に滞在したが、その 2 年後琉球で病死し、その墓は今も那覇市泊の外人墓地に存在している。